2023 年度　人類文化研究コース　学生派遣事業　研究成果レポート

WU WUYUNGA

１．事業実施の目的

ラクダ牧畜を維持するには、群れの管理、母子関係への介入、鼻木と去勢、種雄ラクダの管理という四つの技術が重要である。今回の調査は、博士論文執筆のための補足調査として、それらのなかで「鼻木と去勢」に着目し、これまでの長期調査で記録できなかった諸点を調べることを目的にした。

２．実施場所

中国内モンゴル自治区アラシャー盟左旗・右旗

３．実施期日

2024　年 2 月 2 日（金）～2024 年 2 月 29 日（木）

４．成果報告

●事業の概要

1.調査の目的

報告者の博士課程における課題は、中国内モンゴル自治区アラシャー盟におけるラクダ牧畜を対象に、牧畜民によるラクダの群れ管理や母子ラクダへの介入、鼻木と去勢、種雄ラクダの管理といった牧畜技術を民族誌的に記述し、そのうえでラクダと人間が極乾燥地において長期にわたり関わりを維持できる仕組みを明らかにすることである。今回の調査目的は、鼻木つけと去勢に着目し、その技術を記録したうえで、ラクダ牧畜を維持するうえでの意義を明らかにすることである。

2.調査の内容

報告者は 2024 年 2 月 3 日～23 日まで中国内モンゴル自治区アラシャー盟の右旗と左旗にて、計 9 世帯を訪問し、11 名のラクダ牧畜民に対してインタビュー調査を実施した。(11 人の内訳は、女性 6 人、男性 5 人である。年齢は 30 代が 2 人、60 代が 7 人、70 代が 1 人、80 代以上が 1 人である。)

現地では、ラクダの鼻木つけと去勢について以下の 5 つの項目に関わる調査を実施した。

① 鼻木つけや去勢はいつ、どこで、誰が、どれだけの頭数をおこなうのかという基本的な状況に関わる調査。

② 去勢を施す技術に関わる調査。

③ 鼻木つけや去勢をおこなう際にみられる儀礼的な側面に関わる調査。

④ 鼻木つけや去勢が終了したあとの働きかけに関わる調査。

⑤ 鼻木つけや去勢が施される際にみせるラクダの行動に関わる調査。

報告者は、2 月 3 日から 2 月 12 日にかけて、アラシャー盟右旗のムンゲンソム、アラタ

ンオボー、バヤンタラソム、ウリントヤガチャー、タムスグソムにおいて上記の項目に関わる調査を実施した。その後、2 月 17 日から 2 月 23 日にかけて、アラシャー盟左旗を中心地として、インゲンソム、ホンゴルリン、ジラタイ鎮一隊などの地域において、同様の聞き取り調査を実施した。こうした一連の調査を通して、ラクダの鼻木つけや去勢をする時期、場所、労働力の分配、去勢される対象の頭数、去勢する際に用いる技術、年齢といった基本的な状況がわかった。鼻木つけと去勢をした後のラクダに対する働きかけや、儀礼的な側面も記録することができた。

くわえて、2 月 24 日から 28 日まで、中国内モンゴル自治区アラシャー盟、北京国家図書館において鼻木と去勢に関わる文献調査を行った。

●本事業の実施によって得られた成果

以下では、本事業と通して明らかになったことをまとめる。

(1) 鼻木つけに関して

鼻木つけに関わる現地調査を通して、牧畜民による鼻木つけの技術や鼻木に対する認識を明らかにすることができた。

鼻木つけはラクダを統御、馴致、利用するための一種の技術である。今回の調査を通して、鼻木つけがラクダ牧畜を維持するうえで重要な役割を果たしていることをわかった。鼻木つけの作業はラクダの鼻にブイラ（*buila*）と呼ばれる棒を刺すことである。アラシャーの牧畜民は毎年の 10～11 月になると 3 歳のラクダに鼻木をつける。この作業をモンゴル語でブイラフ（*buillah*）という。それは雌雄の区別がなくおこなわれるものである。ラクダは大型の家畜動物である。そのラクダの行動を鼻木なしでコントロールし、利用するのは非常に難しく、かつ危険を伴うことである。よって牧畜民はラクダに鼻木をつけることによってその行動を制御し、利用しようとしている。今回の調査によって鼻木つけはラクダ牧畜の維持に不可欠な技術であることがわかった。

さらに、鼻木つけはラクダの一生における重要な転換期であることも明らかになった。牧畜民は鼻木つけの作業を「ラクダの成人式」とよび、鼻木をつけたラクダに対して「本当のラクダになった」と認識している。牧畜民は 1～2 歳のラクダを「子供」として認識し、それを利用しない。ラクダが 3 歳になると鼻木をつけ、そののち騎乗のための調教やトレーニングを実施する。すなわち、ラクダは鼻木をつけられるとようやく利用の対象になる。このような鼻木つけと利用形態の変化に関しても今回の調査から明確になった。

(2) 去勢に関して

今回の調査を通して、去勢が施される年齢の変化と去勢技術の選択を明らかにした。

去勢は動物の生殖の必要な部位を摘出する技術である。ラクダの場合、雄は 3～5 歳になると種雄以外すべて去勢される。ラクダの去勢の作業は鼻木つけと同じ毎年 10～11 月に実施される。なかでも牧畜民はその期間内で縁起の良い日を選ぶ。ラクダの去勢をモンゴル語

でタイラグ・アタラフ（*tailag atalah*)、あるいはアタ・ボスハフ(*ata boshah*)と表現する。

一般に、アラシャーにおける牧畜民は雄が 4〜5 歳になると去勢をすると認識している。しかし、近年、雄が 3 歳になると去勢を施す牧畜民がいることがわかった。

早期に去勢をする牧畜民の多くは、ラクダ乳の販売に専念している。彼らが雄を早く去勢する理由は、雄の管理に手間をかけたくないからである。通常、雄は 3 歳に性成熟が始まり、冬になると発情して雄同士でケンカをすることが多くなる。こうなると管理が難しい。よって牧畜民は雄が 3 歳になると去勢することで群れを安定化させる。これにより乳の販売にも専念できる。もちろん、雄が 4〜5 歳になってから去勢する牧畜民もいる。これは、雄を早めに去勢してしまうとラクダの体躯が大きくならず、筋肉がつかないからである。体躯の小さい雄ラクダは販売価格が安いため、雄個体の販売で生計を立てる牧畜民にとっては収入減を招くことになる。よって牧畜民のなかにはラクダの筋肉や体躯を重視し、去勢の年齢を遅らせるものもいる。このように、乳の販売や雄個体の販売といった経営戦略の違いによって去勢時期が異なることが明らかになった。

次に、去勢の技術に関して、アラシャー盟に主に三つの技術が知られている。それはボージュ・アタラフ（*booj atalah*、直訳すると、縛って去勢するという意味)、ハイラジュ・アタラフ（*hairaj atalah*、直訳すると、焼いて去勢するという意味)、スゥグラジュ・アタラフ（*sugulj atalah* 直訳すると、抜き出して去勢するという意味）である。

このなかで、牧畜民たちは前二者の技術を多用していることがわかった。なぜなら、前二者の技術は去勢後に治りやすく、体力も回復しやすいからである。後者のスゥグラジュ・アタラフ方法は、ラクダの体への影響が大きく、短期間に体力を回復することができない。ひいては去勢後に死亡することもある。このため牧畜民は後者の方法をあまり利用していない。いずれにしても牧畜民はラクダへの影響も考慮しながら慎重に去勢の技術を選択していることがわかった。なお、三つの技術に関しては博士論文の中で写真や図表を入れて詳しく説明する予定である。

(3) 儀礼に関する調査

報告者はこれまで、ラクダ牧畜の技術を中心として調査してきたが、今回の調査を通して去勢や鼻木の儀礼に関する資料を新たに収集することができた。なかでも去勢に関する資料を多く集めることができた。たとえば、ラクダの去勢をする前に去勢を実施する人物を誘う儀礼、縁起の良い日を選ぶ方法、去勢をおこなう際のタブー、去勢を終了したときの浄化の方法、去勢雄への祝詞などである。モンゴル語で書かれている既存文献において鼻木つけと去勢の技術は詳しく記録されているが、儀礼的な側面をまとめたものは少ない。よって儀礼に関する資料は非常に貴重であり、博士論文の内容にも展開できると考えている。なお、儀礼に関するはあくまでも未公開の資料であるため、具体的な内容は博論のなかで記述する。

●本事業について

本事業によって中国内モンゴル自治区アラシャー盟の右旗と左旗の広い地域においてフィールド調査が可能となった。アラシャー盟は面積が 27 万㎢もあり、現地で移動しながら聞き取り調査をするのは容易ではない。こうしたなか、本事業によって調査が可能となり、非常に重要な資料を得ることができた。本事業の実施を許可していただいた先生の方々と担当者の皆様に感謝したい。今後も学生派遣事業が継続されることを望みます。